

演題番号 追跡調査から大学生の喫煙行動に関連する要因の分析

○北田雅子^{きただまさこ} (札幌学院大学 経営学部) , 中山直子 (首都大学東京 都市環境科学研究科) , 瀬在泉 (武蔵大学)

【背景】大学生の喫煙率は、入学時には数%と低いものの、学年を経る毎に上昇していく傾向が全国的にみられる。ひとりでも多くの学生を非喫煙者のまま卒業させることは、日本の成人喫煙率の低下、その後の生活習慣病リスクの軽減に大きく寄与することから、大学生への喫煙防止教育の必要性は高い。

【目的】本研究では、大学生への効果的な喫煙防止教育を検討するために、大学生の喫煙行動とその関連要因を明らかにする事を目的とした。

【方法】1) 対象：札幌市内の文系総合大学に入学した学生を対象に自記式調査を実施した。調査時期は2008年(1年時)と2009年(2年時)4月のガイダンス時に実施した。データの連結には学籍番号を用いた。将来の喫煙行動と関連要因の分析には、2008年時の喫煙未経験者の中において将来の喫煙意図を持っていない446名(男子286名、女子160名)を解析対象とした。

2) 調査項目：性別，年齢，喫煙状況，周囲の喫煙状況，ライフスタイル，喫煙対策への意見とタバコ製品や喫煙への意識(加濃式社会的ニコチン依存度調査票：KKTSND)について尋ねた。

3) 統計解析：2008年時に喫煙未経験の者で、その後「現在喫煙」，「試し喫煙」，「前喫煙」のいずれかの喫煙行動を選択した者を喫煙行動選択者とした。将来の喫煙行動選択と2008年時の要因との関係を明らかにするために、喫煙行動選択を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析を行い、オッズ比と95%信頼区間を求めた。

【結果】周囲の喫煙者と喫煙行動選択は、「友達の喫煙」のみが弱い関連を示した。ライフスタイル要因は、「野菜を食べない」(OR=2.98, 95%CI (1.04-8.56))，「お酒を週数回以上飲む」(OR=5.79, 95%CI (1.04-32.41))が喫煙行動選択リスクを高めた。タバコ製品や喫煙に対する意識は、KTSNDの「タバコには効用(カラダや精神に良い作用)がある」という設問へ肯定的な回答(OR=1.85, 95%CI (1.06-3.20))が、さらに喫煙規制については、特に、大学の喫煙対策に反対(OR=1.61, 95%CI (0.92-2.85))の態度を持つ者が、その後の喫煙行動選択リスクを高めた。

【考察】本研究から、喫煙行動選択の前段階として注意すべきライフスタイルは、週に数回以上の飲酒頻度がある者、野菜の摂取を含めて健康的な食生活へ関心が低い者であった事から、入学後、適正飲酒も含め、健康的な食生活のあり方を中心に教育を実施していく必要がある。さらに、喫煙に何らかの効用を期待する者がリスクが高い事から、喫煙の効用を過大評価する認知の是正のために、ストレス対処法と併せて教育介入する必要があると考えられた。さらに、喫煙規制に対して反対の態度を持つ者のリスクが高い事から、受動喫煙の害と喫煙対策の必要性について十分な情報を提供する事が必須であると思われた。

【結論】大学生の喫煙行動を防止するためには、健康的なライフスタイルを強く推奨していくと共に、喫煙そのものや受動喫煙対策への誤った認知の是正を促すアプローチが重要である。

E-mail ; masakita@e.sgu.ac.jp